CO患者家族＝塚本ミスエさんの証言

三～四歳児に逆もどり

被災前は才能ある夫だった

ここに、CO患者の塚本正勝さんの妻――ミスエさんの証言をおとどけする。

この証言は、今福岡地方裁判所民事部で進んでいる三池大災害裁判の、昭和五十五年九月十七日に開廷した公判の席で行なわれたもので、CO中毒患者に共通的に見られる、ごく典型的な、夫のCO中毒症について、戦慄すべきその実態を語っている。三井独占資本が犯した犯罪がどれほど大きいものであるか、を思わずにはいられない。

CO患者――塚本正勝さんは五十四歳。大爆発さえなかったならば、今ごろは立派な社会人として堂々と世間を歩いていることができたものを、大爆発に被災したばかりに廃人となり、今も大牟田労災病院で療養生活をおくっている。

証言にあるように、本人は不幸にして三～四歳児の知能・機能に落ちこんでしまっているので、あるいは苦痛（とくに精神的な）を感じないで生きているだろうが、そのためとくに家族がなめた苦しみは言語に絶しているはずだ。あえて、ここにその証言を紹介することにした。

医者の話信じたのに

変わってしまった〝人間〟

問 い　爆発があった翌――十日の午前五時近くだと思いますけど、荒尾市民病院で主人の顔を見ました。そのとき主人は意識不明で、医師が三人立って、白衣なんかでからだをくるんで、「今やっとおとなしくなった」と。私はそのときは「ああよかったお父さん」と飛びかかりたかったけど、先生が「今やっと静まったから、声をかけてくれるな」、といわれまして。相当興奮状態だったのだろう、と思っています。

問 い　それからご主人は気がつかれた？

答 え　気がついたというより、まア目が覚めたといった感じになって、結局自分の名前もわからず、子どももわからない、私もわからない状態になっていました。

問 い　食事はとれたんですか。

答 え　八分目ぐらいのご飯を全員に配ってまわられたけど、うちの主人たち四～五人の被災者は全然ご飯が食べられなかったから、「うちはご飯が食べられんとですよ」というたら、先生は「いや、心配せんでいいですよ。ガス吸うとるとは三日ぐらいで治りますから」、といわれたから、その三日を楽しみにしていたのでした。

問 い　意識の方は？

答 え　目はあけてはいるけど、何もわからず、結局は意識はなかったです。そのころ病院には物でも転がしたように、そんな人間ばかりをベッドの上に置いてあったわけです。お見舞い客がくるわけですね。それを見ても、主人はもう興奮して、何といってよかか、暴れるというでもなく、もう気違い見たいになってしまいました。

ついに麻酔も効かぬ体に

問 い　その後はどういう状態でしたか。

答 え　地域分会組織から交代交代で介抱にきてもらって、ご飯を食べないもんだからずーっとリンゲルを打つために、注射一本打つのに五人ぐらいでおさえてもらわなければなりませんでした。

問 い　お医者さんは、どんなことをいっていましたか。

答 え　最初は、お医者さんのいい方を信じて、三日か四日すると元にもどるとばかり思うていました。一週間たってから先生がいわれたことは、「塚本さん今までつくしてきたけれど、もうお宅のご主人はダメですよ。あきらめてください」ということで、そういわれたとき私は悲しくなって、「先生、麻酔でも打ってもらってはでげんでしょうか」と頼みました。けど、麻酔がきかないし。五、六人の人たちが上から乗っかって、主人のからだをみんなでおさえつけて、そして注射したものでした。

ベッドのうえに立って放尿

問 い　血液をいれ替えたことがありましたね。

答 え　はい。先生たちの話し合いの上で、「塚本さん、ご主人の血のいれ替えをしましょう」というて、熊大や九大から先生がいっぱいきて、主人のからだのなかの血のいれ替えをしました。少しおとなしくなった気持はしましたが、注射をするときはやっぱり、主人のからだをつかまえる手伝いがいりました。

問 い　ところで、用便はどうしたんですか。トイレには？

答 え　いかんわけですよ。ベッドの上に立ち上がってそのまましたり……。夜、ベッドの下に横になっていると、上から何回となくかけられました。

問 い　大便は？

答 え　オムツカバーをはめてやりました。だけど、注射ばかりでご飯食べないから、大便はあまり出なかったわけです。

×

証言は、このあと、証人の夫の正勝さんが、大爆発に被災した結果完全に〝痴呆状態〟の人間にさま変わりしてしまった恐るべき事実について述べています。そして、続けて――

たとえタバコの火落ちても

問 い　タバコは吸いますね？

答 え　はい。吸いますけど、タバコの火が下に落ちたのには全然気をつけんわけです。コタツのフトンとか、畳とか、自分のズボンとか、いつもタバコの火で焼いとるわけですね。ですから冬など、火が危いですからだれかがお守りせんといかんとです。

問 い　ところで、お医者さんはご主人の知能程度はどのくらいといっていますか。

答 え　三歳児か、四歳児の知能だといわれています。

被災前には本も読んでいた

問 い　あなたは、原告のひとり塚本正勝さんの妻ですね。

答 え　はい、そうです。

問 い　ご主人は、事故前はどういう性格だったんでしょうか。

答 え　ロゲンカぐらいはたまにはしたことありますけど、子供をたたいたとか、私に暴力をふるうということは全然ありませんでした。

近所付き合いはものすごくよく主人は、将棋とか、電気器具類の扱いが好きだったもんですから、「ちょっとラジオが故障したから……」と頼まれると、いって故障をなおしてやったり、そういうことをしていました。

問 い　事故前、本を読むとか、新聞を読むということは？

答 え　本を読むことが好きだったから、一番方のときでも、二番方や三番方のときでも、寝る前に、本の一冊でも読んでしまうぐらい、本を読むのがものすごく好きだったです。

塚本正勝さんのカルテメモ

生年月日　昭和二年四月三十日（現在五十四歳。被災時三十六歳）。

職種　採炭。

被災時在坑時間　不明（担送により救出される。逆行性健忘あり）。

意識喪失時間　七日以上

罹災時自覚症状　なし。荒尾市民病院に入院したが翌昭和三十九年三月大牟田労災病院へ。現在に至る。

自覚症状　なし。（わからない、という意味）

精神症状　高度の情意鈍麻。高度の多幸。高度の痴呆。高度の記銘力障害。高度の記憶障害。高度の計算障害。高度の思考困難。

神経症状　錐体路（有）。錐体外路（有）。自律神経症状（有）。

その他　省略。

人の着物もわからぬ

鏡餅たいらげて知らぬ顔

三日で治るはずだったのが

問 い　事故後最初に会ったときご主人は、どういう状態だったですか。

答 え　ただ家に帰ったというだけで、窓のところに座ったなら座ったままです。着物も、着ているなら着たままです。

問 い　食事なんかのとき、家族の団欒はどうでしょう？

答 え　全然ありません。話すといっても、タバコがなかかっていうことと、クスリを飲むということぐらいで、被災後十五年間ほかの言葉をいったことはないです。

問 い　食事の仕方は？

答 え　目の前にあるとはあるだけ、食べます。おかずなら、それだけをまず食べてから、ご飯を食べる。「ああ、こっちがおいしいばいな。ではこっちから」と、そういうことは全然ありません。（後、かなり省略）

問 い　たとえば、普通ピーナツだったら皮をむいて食べますが、そういったことは？

答 え　長男が、「お父さん、こげんして、皮をむいて食べんね」ちゅうて、最初皮をむいてやっていましたけど、二回目に食べるときにはもう、そのまま口にいれるとです。で長男が教えてやると立ち上がって、子どもをいやというほど、とって投げてですね。子供がかわいそうで……。

鏡餅たいらげて知らぬ顔

問 い　食べ物の話ですが、着れに鏡餅を食べてしまったとか？

答 え　ある年の十二月二十八日のことです。餅をついたとき、鏡餅がまだやわらかかったのでお盆の上に乗せて、コタツの台の上にのせておいたわけです。ところが主人が、その鏡餅を食べてしもうとるわけです。「あら、ここにお鏡があったのを、お父さん食べたんじゃない」というたら、「うんにゃ、食べとらん」というわけですね。たとえ食べていても、食べたということの意味がわからんとです。お鏡は小さくないのです。下のは丼ぐらいの大きさはあるですよ。これが人間だろうか、と情なかったです。

お風呂から帰ってきたら

問 い　着物を着ることなどに対する理解力は？

答 え　たとえ着物を出してやっても、シャツの袖を脚に差してみたり、ズボンを頭にかぶったりするし、社宅の風呂にいって、家に帰ってからすぐ着物を脱がせて身体検査するわけです。すると下に人の着物を着て帰っていたことさえありました。それを脱がせて、また風呂場まで走っていったわけです。すると、そこでは自分の着物がないといって、捜している。「すみません。うちの主人が着て帰ってきていたから……」と何回あやまりをいいにいったことでしたか。

×

証言は右のあと、実父母を亡くしたときの無関心ぶり、盲腸炎をわずらい、手術した次の日に、病院のベッドから脱け出して、町をうろうろしているところをつれもどされたり、金に関する計算がゼロだったりする驚くべき事実を明らかにしている。そのあと……

原告団消息

3日　金子・小鹿原両医師によるCO患者の検診。

この日〝みいけ〟原告団編集会議。

前日に引き続き、金子・小鹿原両医師によるCO患者の検診。

4日　この日、金子医師とCO患者家族の会（役員）と懇談。